

(別紙様式3)

令和5年3月31日

事業完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所	062-8603 北海道札幌市豊平区旭町4丁目1番40号
管理機関名	学校法人北海学園
代表者名	理事長 安酸 敏眞

令和4年度WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業に係る事業完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

令和4年5月25日（契約締結日）～令和5年3月31日

2 事業拠点校名

学校名 北海学園札幌高等学校
学校長名 竹越 広志

3 構想名

Snow Crystal Project in HOKKAIDO
スノー クリスタル プロジェクト イン ホッカイドウ

4 構想の概要

広大な大地「北海道」の全地域においてSDGsと国際理解の教育実践に取り組んでいる高校と海外の高校、大学、関連する機関を繋ぎ「北海道広域ALネットワーク」を形成して組織的・継続的に活動し、持続可能な世界の実現に向けて逞しく行動し、かつSociety5.0を牽引するグローバルリーダーの育成を目的とする。具体的にはSGH（スーパーグローバルハイスクール）事業の研究をベースに、連携校の多様な視点と実践を積極的に活用して相互の教育効果を高める。また、距離と時間を克服すべく、ICTを活用した教育にも継続的に取り組む。さらに、当事業の展開にあたり、専門的で先進的な技術を有する大学や企業を連携機関として指導助言を仰ぎ、北海道らしさを特色とする教育カリキュラムを深化させる。例えば農業、食品ロス、民族・領土問題、寒冷地における生活、外国人労働者(技能実習生)問題解決などを生徒の探究課題としたい。Snow Crystal Project in HOKKAIDOを通じて、グローバルリーダーモデル創造と北海道広域ALネットワークの拡充に努め、全国はもとより世界に向けて新たな教育を発信したい。

5 教育課程の特例の活用の有無

なし

6 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	実施期間（令和4年5月25日～令和5年3月31日）											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
運営指導委員会				○					○			
ALネットワーク 連絡調整会議				○					○			
カリキュラムアドバイザー			○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
WWL年間活動発表会 GLOBAL DAY									○			
検証委員会									○			
ALT配置	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
留学生受け入れ					○							
各海外研修事業検討・調整	○	○	○					○	○	○	○	○
ICT構築	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

(2) 実績の説明

【実施体制の整備】

a.体制の整備状況について

WWL Snow Crystal Project in HOKKAIDO における運営指導委員会ならびに検証委員会

- ①運営指導委員会
- | | | |
|-----|----------------|-----------------------------|
| 委員長 | 山中 康裕 | 北海道大学大学院地球環境科学院教授 |
| 委員 | 荒川 義人 | 札幌保健医療大学保健医療学部長・教授 |
| 委員 | 飛谷 淳一 | 酪農学園大学准教授 |
| 委員 | 石山 智浩 | 北海道教育庁学校教育局高校教育課主任指導主事 |
| 委員 | Matthew Cotter | 北星学園大学短期大学専任講師 |
| 委員 | 櫻井 和宏 | 株式会社 JTB 北海道事業部札幌教育旅行センター所長 |
- ②検証委員会
- | | | |
|-----|-------|---------------|
| 委員長 | 森 雅人 | 札幌大谷大学社会学部教授 |
| 委員 | 前田 輪音 | 北海道教育大学札幌校准教授 |
| 委員 | 西村 卓也 | 北海道新聞社論説主幹 |

b.情報共有体制の整備

令和4年7月4日（月）に運営指導委員会並びに Snow Crystal Project in HOKKAIDO AL ネットワーク連絡調整会議を実施した。この中で、新型コロナウイルスの感染防止に努めながら、本事業の円滑な運営を求める意見が多く提起された。また、新型コロナウイルス感染防止対策と決して消極的にならない連携校間交流との両立を求める意見も多く提起された。さらに、12月17日（土）に運営指導委員会と検証委員会、Snow Crystal Project in HOKKAIDO AL ネットワーク連絡調整会議を実施し、本年度の事業が適切に実施されていることを確認した。

c.管理機関の長・事業拠点校長の果たした役割

管理機関である学校法人北海学園、事業拠点校である北海学園札幌高等学校ともに、Snow Crystal Project in HOKKAIDO 事業計画の円滑な運営に努めた。特に、事業拠点校の学校長と事業連携校の学校長、事業連携機関の担当者らがオンライン、あるいは、直接の会議を重ねた。北海道内における新型コロナウイルスの感染拡大といった情勢のもとで、事業の規模、参加生徒数が減少する事業もあったが、相互理解のための打ち合わせや会議の場を意識して設け、情報の共有に努めた。また、10月には事業連携校が主催する事業に事業拠点校の学校長が直接生徒を引率する機会も設け事業の適切な運営を確認することができた。

d.運営指導委員会・検証委員会の状況

当初は5月に実施していた Snow Crystal Project in HOKKAIDO 運営指導委員会を令和4年7月4日（月）に実施した。文部科学省から当事業指定を受けて令和3年度に事業を実施してきた実績があり、運営指導委員会からの事業そのものに対する評価も概ね好意的な意見が多かった。主な意見は以下のとおりである。

- ① 北海道らしい内容を教材として設定し、SDGs と関連付けて探究を進めようとする姿勢が好ましい。
- ② 北方領土問題、アイヌの生活、文化、まちづくり、英語、国際協力、環境保護、農業などとテーマが多岐にわたり、生徒が選択する機会が充実している。
- ③ 各高等学校の先進的な探究を相互に共有することがオンラインで可能になった点は非常によい。
- ④ 各事業に参加した生徒のリポートやアンケート結果によると、達成感や満足感、自己肯定感を表現した内容が多くみられる。

こうした意見の一方で、当事業の一層の発展と充実を目指すための意見もいただいた。令和4年12月17日（土）に実施した Snow Crystal Project in HOKKAIDO 運営指導委員会と検証委員会の中でも、7月の運営指導委員会同様に好意的な意見が多く、さらなる充実を目指すための意見もいただいた。いただいた主な意見が以下のとおりである。

- ① 事業に参加した生徒が、関連するテーマに対する探究を個人的により発展させていく取り組みをもっと設定した方がよい。
- ② 事業によって、参加する事業連携校数に偏りがあり、事業連携校の年間教育計画や都合上のやむを得ない状況もあるが、事業拠点校はこの偏りをなくするための最大限の努力をすべきである。
- ③ Snow Crystal Project in HOKKAIDO における学習・探究活動を普段の生活と、どの

ように関連付けていくかという生徒へのアプローチを通常の授業やホームルームにおいて、より積極的にアプローチすべきである。事業拠点校並びに事業連携校、各校事情も北海道の地理的特性も理解できるが、ICTも活用しながら、より一層綿密な連携の関係を構築していくべきである。

e.事業拠点校卒業生の把握等について

管理機関である学校法人北海学園が事業拠点校に委託し、事業拠点校は、卒業生に対して卒業後の進路を記録している。また、卒業生にメールアドレスを登録させ、卒業後の進路において、イノベティブなグローバル人材を目指して取り組んでいることの把握に努める。例えば、留学経験や海外の大学に進学した中での状況、SDGs 関連の活動への参加状況、グローバルイシュー（地球規模の懸念される課題）に対する解決のための生き方の実践を報告してもらい、こうした成果を事業拠点校の在校生に対して、講義の場を設けるなどしてイノベティブなグローバル人材を目指す生き方の共有を図っている。

f.アジア高校生架け橋プロジェクト・海外留学生支援体制について

アジア高校生架け橋プロジェクトについて事業拠点校に委託し2年生及び1年生全員に対して資料を配付し、興味関心を喚起している。本年度は事業拠点校に設置させている国際交流委員会委員長の小林真史教諭が生徒及び保護者に合計6件の対応をした。また、同委員会が恵庭市ロータリークラブを通じて1年生1名をオーストラリアのブリスベンに1年間派遣している（令和5年7月帰国予定）。これにあたり、同委員会は保護者と定期的に連絡を取り合うことで校内における情報共有に努め、さらにメール等を通じて生徒のケアに努めている。また、海外連携校である台湾基督教協同高級中學、ニュージーランドのウエリントンハイスクールとも定期的にオンラインミーティングを実施し、ICTの活用による交流授業もグローバルコースを中心に実施した。令和5年1月にはオーストラリアのブリスベンより1名の男子留学生を、新札幌ロータリークラブを通じて事業拠点校に受け入れる予定で準備を進めていたが、新型コロナウイルスの感染拡大を受けて現地より打診があり、受入を中止した。

g.教職員の意識改革等について

全教職員へのノートパソコンの配布、専用メールアドレスの配布、電子黒板を全教室に設置して Snow Crystal Project in HOKKAIDO の各事業における情報共有を円滑に行えるよう整備した。また、事業拠点校内に情報管理委員会を設置して ICT 活用のための研修会を実施した。

h.留学生の受け入れについて

当初は、オーストラリアから男子学生1名を受け入れる予定であったが、新型コロナウイルスの感染拡大およびオーストラリア現地の判断を受けて、本年度は留学生の受け入れることを中止した。

【財政等支援】

a.管理機関による自己負担額について

管理機関が自己負担額として計上した7,415,350円に加えて、事業拠点校の年間予算に緊急時に備えてWWL事業用経費を300,000円計上した。

b.研修やセミナー等の実施状況について

管理機関が敷地内に畑をつくるための用地を用意し、かつ施設課職員を配置して耕作の具体

的指示にあたった。また、SDGs や WWL に関係するセミナー等への教員の参加を促すように事業拠点校の学校長に連絡をした。

c.委託終了後の継続的事業実施について

管理機関は、国の委託終了後も事業拠点校と事業連携校が相互ネットワークを活用して学習・探究活動を継続することができるように、同規模となるかどうかは検討しつつ、引き続き費用負担において責任をもつ予定である。

【AL ネットワークの形成】

a.AL ネットワーク運営組織の実績

令和4年度の Snow Crystal Project in HOKKAIDO における AL ネットワークの形成に取り組んだ内容は以下のとおりである。

- ① 運営指導委員長 山中康裕教授との方針会議
日時 令和4年5月26日(木) 午前11時から午後0時
会場 北海学園札幌高等学校 2階 校長室
- ② 第1回運営指導委員会
日時 令和4年7月4日(月) 午後2時から午後3時30分
会場 北海学園札幌高等学校 2階 会議室
内容 ・令和3年度の事業紹介並びに総括
・令和4年度の事業計画審議並びに連携機関への協力内容の確認
- ③ 運営指導委員 荒川義人教授との事業内容確認のための会議
日時 令和4年7月29日(金) 午後1時から午後2時
会場 札幌保健医療大学 2階 中教室
内容 フードロス削減に向けた探究のためのアドバイスを得る
- ④ 運営指導委員 飛谷淳一酪農学園大学准教授との事業確認のための会議
日時 令和4年11月17日(木) 午後1時から午後2時30分
会場 酪農学園大学 8階 応接室
内容 循環農業の重要性と農業活動を通じた教材の開発に関する会議
- ⑤ 検証委員会
日時 令和4年12月17日(土) 午前8時30分から午前9時30分
会場 北海学園札幌高等学校 2階 校長室
内容 ・令和4年度 Snow Crystal Project in HOKKAIDO の各事業の点検と評価
・参加生徒によるレポートやアンケートの点検
- ⑥ 運営指導委員会
日時 令和4年12月17日(土) 午前8時30分から午前9時30分
会場 北海学園札幌高等学校 2階 校長室
内容 令和4年度 Snow Crystal Project in HOKKAIDO の各事業報告・総括
- ⑦ AL ネットワーク連絡調整会議
日時 令和4年12月17日(土) 午前9時30分から午前10時15分
会場 北海学園札幌高等学校 2階 会議室
内容 ・令和4年度 Snow Crystal Project in HOKKAIDO の各事業報告

・本年度活動発表会-GLOBAL DAY-の運営について

b.情報共有体制の整備について

管理機関である学校法人北海学園のもと、事業拠点校である北海学園札幌高等学校が事業連携校並びに事業協働機関とALネットワーク連絡調整会議、オンライン会合、事業拠点校事務局の教員による直接訪問の形態を採り、情報共有を明確に実施しながら生徒の学習・探究活動をサポートした。また、新たに開発した協働事業も含めて以下にご報告申し上げます。

- ・令和4年7月4日(月) ALネットワーク連絡調整会議
- ・令和4年9月2日(金) 事業連携校である北海道平取高等学校にて新事業の具体化協議
- ・令和4年10月19日(水) 北海道平取高等学校 PRESENTS 探究! アイヌの生活と文化実施
- ・令和4年12月17日(土) ALネットワーク連絡調整会議
- ・令和4年12月17日(土) 運営指導委員会
- ・令和4年12月17日(土) 検証委員会
- ・令和5年12月20日(火) 運営指導委員 酪農学園大学 飛谷淳一准教授との協議
- ・後述の7研究開発の実績(1) 実施日程に記載の各事業の1ヶ月前には郵送とFAXにて案内を送付・送信

c.海外への進学及び留学の促進について

国内外の大学進学、国内外トップ大学進学、海外留学の促進を目指し、グローバルイシュー(地球規模の課題)を探究するイノベティブなグローバル人材の素養を育成すべく、海外研修の実施計画、留学支援(事業拠点校から1年生が1年間のオーストラリア留学中)、外国人教員(英語2名、中国語2名、韓国語1名)の配置を実施した。

d.事務局の設置及びカリキュラム開発人材について

事業拠点校内に事務局を設置し、教職員が職務を遂行する。事務局は20代から50代の広範な年齢層によって構成し、人材育成も兼ねている。また、カリキュラムアドバイザーを事業拠点校の前校長である大西修夫氏に依頼し、週12日を事業拠点校における各事業の点検、助言指導に充てている。

e.高校生国際会議の実施準備状況等について

2024SDGs高校生国際会議を令和6年度に実施予定である。ここにおいては、Snow Crystal Project in HOKKAIDOにおいて結集した『北海「働」力』をSDGs達成のために積極的に我が国、世界へ発信する予定である。そして、これに向けて、事業連携校及び事業協働機関とともに、探究課題の設定と生徒の探究活動のサポート、財政支援を管理機関として実施している。

f.成果報告会の実施について

事業拠点校である北海学園札幌高等学校において、令和4年12月17日(土)に年間活動発表会(報告会)を実施し、事業拠点校及び事業連携校の生徒が、探究活動の発表を行った。さらに、運営指導委員、検証委員の方々、事業協働機関の担当者にご同席を賜り、助言と評価をいただいた。

g.ALネットワーク運営組織による情報収集・提供について

事業連携校である名古屋大学教育学部附属中・高等学校より、実施した高校生国際会議につ

いて、実施内容、実施形態について情報の提供を受けた。また、北海道大学大学院の山中康裕教授より、持続可能な北海道・世界高校生コンテストの審査依頼を受け、12月30日から1月6日にかけて、事業拠点校教諭の小林真史がオンライン上での審査にあたった。高校生の考えるSDGsに対する意見・主張に触れ、若い世代の学習情報を得る良い機会となった。

h.関係機関との協定文書等について

特になし。

7 研究開発の実績

(1) 実施日程

業務項目	実施期間（令和4年5月25日～令和5年3月31日）											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
①高校生のための統計学入門	○	○										
②学校の空き地で野菜栽培 （住み続けられるまちづくり×農業）		○	○	○	○	○						
③運営指導委員会				○								
④ALネットワーク連絡調整会議				○					○			
⑤GLOBAL VILLADGE	○	○										
⑥WWL連絡協議会			○									
⑦アイヌ民族の植物利用の知恵		○	○	○								
⑧GLOBAL SUMMERCAMP					○							
⑨ENGINEERING LABO							○	○	○	○		
⑩探究！アイヌの生活と文化							○	○				
⑪北方領土探究講座							○	○				
⑫年間活動発表会 GLOBAL DAY									○			
⑬全国高校生フォーラム									○			
⑭運営指導委員会									○			
⑮検証委員会									○			
⑯ホームページ開設	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑰WWLニュース発行		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
⑱リーフレット発行											○	
⑲英語スキルアップ講習		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
⑳Academic English	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
㉑多文化理解	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
㉒プレゼンテーション	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
㉓持続可能な世界北海道コンテスト （審査員）									○	○		

(2) 実績の説明

【研究開発・実践】

a. 設定したテーマ (SDGs) について

本コンソーシアムにおいて設定した探究テーマは、「人間」、「平和」、「環境」であり、具体的には、以下の SDGs を探究テーマとした。

- ・「人間」分野
 - 目標 1 貧困をなくそう
 - 目標 2 飢餓をゼロに
 - 目標 3 すべての人に健康と福祉を
 - 目標 10 人や国の不平等をなくそう
 - 目標 12 つくる責任つかう責任
 - 目標 16 平和と公正をすべてのひとに
 - 目標 17 パートナリシップで目標を達成しよう

- ・「平和」分野
 - 目標 16 平和と公正をすべての人に
 - 目標 17 パートナリシップで目標を達成しよう

- ・「環境」分野
 - 目標 6 安全な水とトイレを世界中に
 - 目標 7 エネルギーをみんなに そしてクリーンに
 - 目標 11 住み続けられるまちづくり
 - 目標 13 気候変動に具体的な対策を
 - 目標 14 海の豊かさを守ろう
 - 目標 15 陸の豊かさを守ろう

これらのテーマに対して学習意欲・探究心を喚起すべく、1年を通じて複数の探究機会を設定し、事業拠点校・事業連携校ともに事前学習、事後学習を設け活動した。

b. カリキュラム研究開発の協働について

本コンソーシアムにおいて考えるイノベティブなグローバル人材像とは、①読解力・表現力 ②科学的思考力・客観的判断力 ③チャレンジ精神 ④豊富な発想力 ⑤他者とのコラボレーション力 ⑥リフレクション能力であり、これらの力を生徒のなかに培うために多くの事業協働機関の協力のもと事業を実施した。具体的には、上記の業務項目表の②から⑪とこれらに協力していただいた運営指導委員、事業協働機関、その他のご協力をいただいた機関等を以下に記載したい（前述の表の①から⑤に以下の番号が対応）。

- ②運営指導委員 酪農学園大学准教授 飛谷淳一様
- ⑤北海道大学大学院環境科学院、栗山町、南富良野町、株式会社 JTB 北海道事業部、公益財団法人コカ・コーラ教育・環境財団
- ⑦酪農学園大学
- ⑧北海道大学大学院環境科学院、北海学園大学、北海商科大学、岩田地崎建設株式会社、札幌ニュージーランド教会
- ⑨北海学園大学工学部
- ⑩北海道平取高等学校、平取町教育委員会 関根健司様、二風谷アイヌ文化博物館
- ⑪公益社団法人北方領土復帰期成同盟、北海道根室高等学校

c.設定テーマ関連科目の設定状況について

本コンソーシアムが設定した前述の探究テーマ（探究課題）に関連して設定中の科目、外国人講師の活用については以下のとおりである。

① 多文化理解

3年生のグローバルコースにおいて2単位実施し、2年生のグローバルコースにおいて2単位実施した。このなかでは、事業拠点校の連携校であるニュージーランドやカナダ、台湾の生活や文化について、提携校の生徒とオンラインで繋ぐ機会を設け、学んだ。

② Academic English

3年生のグローバルコースにおいて4単位実施し、2年生のグローバルコースにおいて2単位実施した。当科目においては時事英語を大学における共通科目レベルの教材や英字新聞等を活用しながら学んだ。なお、当科目は外国人専任教諭が担当した。

③ プレゼンテーション

3年生のグローバルコースにおいて1単位実施し、2年生のグローバルコースにおいて1単位を実施した。WWL年間活動発表会やその他保プレゼン機会に備えて、プレゼンシートの作成やスピーチのトレーニングをすることを主たる内容とした。なお、当科目は外国人専任教諭とのペアワークにより実施した。

④ 総合的な探究の時間－SDGs Beginning－

3年生全コースにおいて2単位実施し、1年生において1単位実施した。当科目においては、国際理解・環境・国際協力分野の探究のために基礎概念を学んだ。GLOBAL VILLAGE や GLOBAL SUMMER CAMP といった国際理解のための行事が含まれており、ここでは生徒が通常の学びの成果を発信した。北海道大学大学院の外国人研究生をはじめとする多くの外国人が参加・協力した。

⑤ 中国語

3年生のグローバルコースにおいて2単位、3年生の総進コースにおいて3単位を選択必修として実施し、2年生グローバルコースにおいて2単位を選択必修として実施した。なお、当科目は北海学園大学の教授が担当した。また、当科目は事業拠点校の台湾文化・語学研修の事前・事後学習とも連携し、中国語の学習、ホームステイ時におけるマナー等の学習機会ともした。

⑥ 韓国語

3年生のグローバルコースにおいて2単位を選択必修として実施し、2年生のグローバルコースにおいて2単位を選択必修として実施した。なお、当科目は北海商科大学の教授が担当した。また、成果として北海道内の韓国語のスピーチコンテストにおいて事業拠点校生徒が第1位を獲得した。

d.海外連携校への留学・研修旅行について

令和4年度は新型コロナウイルスの感染拡大防止を優先し、2年生グローバルコースのカナダブロック大学語学文化研修旅行（3週間）を中止し、長崎県における世界遺産探究、立命館アジア太平洋大学における語学研修、外国人留学生との交流に変更した。国内における研修であっても極めて有意義な研修を行うことが可能となった。なお、令和5年度から当研修渡航先がアメリカ合衆国ポートランド州立大学に変更される予定である。また、ニュージーランド中期研修（選抜生徒 事業拠点校1名 連携校である北海高等学校1名）、ニュージーランド短期研修（選抜生徒 事業拠点校6名 連携校である北海高等学校6名）を中止した。情勢を考

慮し、3月26日から3月31日に事業拠点校が台湾文化・語学研修を嘉義市において実施した。

e.体系的なカリキュラムの編成について

申請時からの事業拠点校の課題とされ、指摘をいただいていたのが理系教科・科目の充実である。そこで、WWL各事業のうち、4月から5月にかけて実施する第1の事業「統計学」を実施した。また、高大連携事業でもある北海学園大学工学部による「ENGINEERING LABO」を10月から12月にかけて実施した。教育課程においては、令和4年度以降の入学生がグローバルコース2年次に物理と化学と生物から選択履修することを可能にし、グローバルコース3年次も同様の措置をとり、グローバルコース在籍であっても、文系のみならず理系進学を可能とする教育課程とした。さらに、令和4年度以降の入学生の学校設定科目として、「会計学Ⅰ」「会計学Ⅱ」「MESE」「メディカル総合」「プログラミング」「医療情報基礎」を設定し、理系の学習を充実させ、これらを教育課程の特色の1つとした。

f.構想目的の達成に資する工夫について

本事業における学習・探究活動が構想や目的と生徒の実際の取り組みとの距離を知るために実施したのは事前・事後アンケートと事業後のレポート作成である。これらの結果からいえることは、いずれの事業においても生徒の実体験を経て、興味や関心、学習意欲、今後の探究意欲が確実に高まっていることである。

g.高大連携事業について

高大連携による大学教育の先取り履修を可能とする取り組み（計画を含む）は以下のとおりである。

- ① 北海道大学大学院環境科学院の山中康裕教授による指導と助言のもとに、GLOBALVILLAGE 2022を事業拠点校、栗山町及び南富良野町において実施した。SDGs 講義、SDGs フィールドワーク、SDGs について学んだことをグラフィックレコーディングを用いて可視化し、最後にグループ単位でのまとめをプレゼンテーションした。また、企業や農家、SDGs を学ぶ研修施設を訪れSDGs を意識した活動にふれた。
- ② 北海学園大学工学部との連携による ENGINEERING LABO 工学部4学科に事業拠点校の生徒25名が参加し、講義・実習を行い、12月実施のGLOBAL DAY 年間活動発表会において発表した。以下に、参加した事業拠点校生徒のアンケート結果を記載する。

(事後アンケート) 回答は北海学園札幌高等学校生 20名

- ア) ENGINEERING LABO トータル満足度 満足 95% 普通 5%
- イ) 北海学園大学工学部への理解度 深まった 95% 少し深まった 5%
- ウ) 工学部での実習満足度 満足 100% 不満足 0%
- エ) 成果発表会の満足度 満足 85% 普通 10% やや不満 5%
- オ) 理系希望者 2021年度の2年生(382名) 13%
- 2022年度の2年生(384名) 20%
- 2021年度の1年生(384名) 20%
- 2022年度の1年生(504名) 22%

*理系希望者の増加に、本事業が少なからず貢献しているとする見方もできる。

カ) 意見

- ✓ 昨年度よりも規模も探究内容も大学教授の講義もレベルアップした。
- ✓ 私たちも頑張ったが、成果発表会における北海道帯広農業高等学校の発表に感動した。

- ✓ パワーポイントを用いて発表会資料を作るのは大変だったけれど、とても楽しかった。
- ✓ 今、立っている場所が、かつて水車が回っている川であったとは信じられない。100年で街並みは大きく変化していることに歴史を感じた。建築を専攻しまちづくりに関わってみたい。ビスマスが磁気センサーになるという勉強を、実験を交えてできたのは、とても有意義であった。
- ✓ チーム内で学びあい、意見を出し合いながらパワーポイントを用いて、プレゼンテーションを作ったのは難しかったが、達成感が大いにあった。
- ✓ 生命工学科のラボに参加したおかげで植物に興味を強くもてた。

(分析 北海学園札幌高等学校教諭 小笠原 裕介 小林 真史)

- ③ 北海学園大学法学部の5時限目の授業を事業拠点校生徒が履修することを制度上可能とした。ただし、生徒が高校の部活動や進学講習へ参加しなければならないといった現実があり、さらなる工夫が必要であるとの認識に立って、両者による協議を継続している。
- ④ 北海商科大学の高大連携協定により、事業拠点校における学校設定科目の中国語と韓国語の授業を同大学教授と准教授が担当する。今年度は事業拠点校の中国語履修生徒が北海道内の中国語スピーチコンテストにおいて第1位を獲得し全国大会への出場権を獲得した。
- ⑤ 酪農学園大学の飛谷淳一准教授の指導を受けて、また、同教授の研究室の学生の助言をいただきながら畑を2面作り、循環農業の重要性を学び、8月のGLOBAL SUMMER CAMP 2022において、収穫した野菜を使用して北海道大学留学生とともにヴィーガン料理の調理に取り組んだ。
- ⑥ 札幌保健医療大学の荒川義人教授と百々瀬いづみ教授の指導を受けて、フードロスを生まない食品の加工を学び、畑に出向いて収穫体験や調理実習を行い自ら食し、グラフィックレコーディングを行った。非常にアクティブな学習機会であった。

(事後アンケート) 回答数 北海学園札幌高等学校生 32名

ア) SDGsのゴール2「飢餓をゼロに」の目的を理解することができた。

そう思う 58.3% 大変そう思う 20.8%

少しそう思う 20.8%

イ) フードロス削減に向けて具体的にできることが何か理解することができた。

そう思う 62.5% 少しはそう思う 25% 大変そう思う 12.5%

ウ) 調理において廃棄せず、別に活用する方法を理解することができた。

そう思う 87.5% そう思わない 12.5%

エ) 感想

- ✓ レッドビートを調理するのは初めてで、食べるのも初めてだけれど、とてもおいしかった。
- ✓ 大根の葉、ブロッコリーの芯と普段はほとんど食べないものを活用して「捨てない」ことの重要性を学んだ。
- ✓ 食べずに廃棄する部分ってこんなにも多いと痛感しました。
- ✓ SDGsのなかで食を考えることはとても大切であると感じました。
- ✓ この機会を通じて無農薬で野菜を育てる大変さ、収穫することの大変さ、野菜をまったく捨てることなく調理することができること・・・たくさんのフードロス削減に関する学びがあり、参加してよかったです。

(分析 北海学園札幌高等学校教諭 三浦 琢斗 小林 真史)

- ⑦ 公立千歳科学技術大学が配信するICT学習支援システムを利用することが可能であり、自習室利用の促進、利用者数の増加につながっている。

h.高度な内容の学習環境の整備について

より高度で先進的な内容を事業拠点校及び事業連携校の生徒が学ぶことができるよう、事業協働機関の教授、職員の方が以下の事業において精力的に協力した。

令和4年8月8日(月)・9日(火) WWL GLOBAL SUMMER CAMP

① SDGs 特別講義 北海道大学大学院 山中康裕教授による講義

② マオリ族の生活と文化 北星学園大学短期大学部講師 Matthew Cotter 氏による英語講義

③ 寒さに強い北国の建築 岩田地崎建設株式会社 上村英二氏による講義

上述の事業について、事業協働機関である北海商科大学を会場に、事業拠点校並びに事業連携校の生徒120名が参加し、北海道大学外国人留学生19名がファシリテーターとして協力した。また、直接会場に足を運べなかった事業連携校生徒が、オンラインで視聴し、質疑応答に参加した。

i.留学生を受け入れる学校体制について

新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、直接日本人高校生と留学生とが一緒に学習する体制を実施する機会が限定的であった。しかし、事業拠点校グローバルコースが活動の主体となり、ニュージーランドのウエリントン高校や台湾の基督教協同高級中學とオンラインで数度、質疑応答と両校・両国を比較し、環境問題の認識と当課題の解決に向け意見を交換した。さらに、令和5年3月26日(日)から31日(金)にかけて事業拠点校の生徒13名が台湾の嘉義市にある事業連携校である基督教協同高級中學と交流した。

また、令和5年1月から1年間、オーストラリアの男子学生1名を事業拠点校に受け入れる予定であったが、情勢を考慮して中止としたいとの先方の判断を受け入れ実施しなかった。

j.その他

事業拠点校卒業生が大学進学後もカナダ、台湾、アメリカ合衆国に長期留学しているという報告や、短期語学研修に参加したという報告を受けている。事業拠点校の国際理解教育、SGH(スーパーグローバルハイスクール)アソシエイト校、そして、WWLコンソーシアム構築支援事業の成果が着実に表れている。

8 目標の進捗状況、成果、評価

a.イノベティブなグローバル人材の育成状況について

Snow Crystal Project in HOKKAIDO 事業を通じて、イノベティブなグローバル人材を育成していく過程における状況を以下にご報告申し上げます。。

① 前述7(1)における各事業

構想計画書において述べた、①読解力・表現力 ②科学的思考力・客観的判断力 ③チャレンジ精神 ④豊富な発想力 ⑤他者とのコラボレーション力 ⑥リフレクション能力

これら6つの力を生徒のなかに養うために、前述7(1)に示した事業を実施した。これらを通じて、生徒は視野の拡大、SDGsに対する複数の興味関心の増大、課題を解決しようとする向学心の豊かさが顕在化してきているようである。各事業において、特に事業連携校のご尽力により、生徒間交流と向学心の高まりが格段と増加した。特に本年度新たに事業の主体を担っていただいた北海道平取高等学校による「探究!アイヌの生活と文化」には改めて厚くお礼を申し上げます。また、事業連携校や事業協働機関にとどまらず、北海道コカ・コーラボトリング株式会社、栗山町、平取町教育委員会からも事業実施にあたり多大なるご協力を賜り、あらためて深くお礼を申し上げます。

② WWL 年間活動発表会－GLOBAL DAY 2022－

令和4年12月17日（土）に、北海学園札幌高等学校において、事業拠点校から9チーム、事業連携校から6チームが参加して、今年度の探究成果をパワーポイントの使用により発表した。運営指導委員、第三者委員、事業協働機関の方々よりお褒めの言葉をいただき、かつ課題を追求する姿勢の重要性を説いていただいた。

③ 運営指導委員会

令和4年7月4日（月）と令和4年12月17日（土）に事業拠点校において実施した。本年度の事業計画の確認と実施事業の報告について意見交換を実施した。

④ 検証委員会

令和4年12月17日（土）に事業拠点校において実施した。本年度の各事業が適宜実施されていることを確認した。

b.ALネットワークが果たした役割等について

- ① 管理機関と事業拠点校とが連携し、北海学園大学や北海商科大学と高大連携事業を推進した。北海道大学大学院地球環境科学研究院、札幌保健医療大学及び日本医療大学との連携事業も推進した。
- ② SDGsを探究するのに最高の事業協働機関の協力の上に成り立っている教育実践である。
- ③ 国内・海外の連携校との交流・共同学習機会の充実、連携の充実。

c.短期的、中期的及び長期的に設定した目標の進捗状況等

事業構想計画書において記述した短期的目標は、①Society 5.0の到来がもたらす私たちの生活への変化を理解することと、②地球市民的視点（Global Citizenship）の重要性を理解することの2点である。そして、これらの目標に到達するために、前述7の（1）の表に記載の事業を実施した。これらのうち、1年生全員を対象とした前述7の（1）の⑤GLOBAL VILLAGE 2022の事前・事後アンケートの結果を記載する。当コンソーシアム運営指導委員長である山中康裕北海道大学大学院教授の講義、同教授の指導に基づくグラフィックレコーディングの実施、グループ単位での生徒による成果発表、栗山町や南富良野町においては、SDGs フィールドワークに取り組んで、生徒のSDGsに対する意識が格段に高まった。

このように言える根拠として以下に、事業拠点校における新入生対象のWWL主要事業であるGLOBAL VILLAGE 2022アンケート結果を記載したい。

（事前アンケート結果） 回答者数 北海学園札幌高等学校1年生495名

- ア) SDGsの意味を知っていますか。
はい 20.4% いいえ 79.6%
- イ) SDGsの目標は何個？
17個と回答したのは77.4%
- ウ) SDGsのNo one will be left behindの意味を知っていますか。
はい 26.3% いいえ 73.7%

（事後アンケート結果） 回答者数 北海学園札幌高等学校1年生457名

- ア) SDGsの意味を知っていますか。
はい 96.1% いいえ 3.9%

イ) SDGs の目標は何個？

17個と回答したのは98.9%

ウ) SDGs の No one will be left behind の意味を知っていますか。

はい 91.2% いいえ 8.8%

(分析 北海学園札幌高等学校教諭 長山 美咲 小林 真史)

さらに、令和4年10月19日(水)には、事業連携校である北海道平取高等学校が主幹校となり、「北海道平取高等学校 PRESENTS 探究! アイヌの生活と文化」を実施した。主な内容は、二風谷アイヌ文化博物館の見学、北海道平取高等学校生と北海学園札幌高等学校生徒が北海道平取高等学校において平取町教育委員会の関根健司様による講話を聞き、その後は、総括としてグラフィックレコーディングを実施し、グループ単位でのプレゼンテーションを行い、探究の成果を共有した。以下に当事業の事業拠点校生徒によるアンケート結果を記載したい。

(事前アンケート結果) 回答者数 北海学園札幌高等学校1年生26名

ア) アイヌ文化に知識がある

はい 50% いいえ 50%

イ) アイヌ文化に興味があるものは

言葉 57.7% 衣食住 38.5% 歴史 30.8%

(事後アンケート結果) 回答者数 北海学園札幌高等学校1年生26名

ア) 本事業への参加の意義

あった 100% なかった 0%

イ) 情報収集・課題解決度

取り組めた 95.7% 不足 4.3%

ウ) SDGs を意識できたか

できた 79.3% できなかった 21.7%

エ) 生徒間交流の積極性

充実した 100% 不満足 0%

オ) 意見・感想

- ✓ 講師の関根さんのアイヌ語に対する想いがひしひしと伝わってきた。
- ✓ 平取高校の生徒さんがとても優しくて、もっと交流の時間を設けてほしかった。
- ✓ 平取町立二風谷アイヌ文化博物館はアイヌ文化を身近に体感できる、とてもよい施設である。

(分析 北海学園札幌高等学校 WWL 担当職員 倉内 瞳 教諭 小林 真史)

令和4年10月19日(金)にはオンラインにて、北海道根室高等学校の北方領土研究会の生徒によるプレゼンテーション発表を、公益社団法人北方領土復帰期成同盟の職員の方のご同席のもとで実施した。

(事前アンケート) 回答者数 北海学園札幌高等学校生85名

ア) 北方領土問題への理解はありますか。

大変ある 8.1% ある 27% 少しある 45.9%

あまりない 16.2% ない 2.7%

イ) 興味を持ち、自ら調べたり、行動したことはありますか。

大変ある 8.1% ある 16.2% 少しある 29.7%

あまりない 29.7% ない 16.2%

ウ) SDGs 17の「パートナーシップで目標を達成しよう」の目的を理解している。

大変ある 16.2% ある 29.7% 少しある 40.5%
あまりない 13.5%

(事後アンケート) 回答者数 北海学園札幌高等学校生 85名

ア) 北方領土問題への理解が深まりましたか

大変そう思う 64.1% そう思う 33.3% 少しそう思う 2.6%

イ) 講義受講前よりも興味関心が高まりましたか。

大変そう思う 66.7% そう思う 28.2% 少しそう思う 5.1%

ウ) 感想・意見

- ✓ さっぽろ雪まつりで行われている署名活動に、根室高校の皆さんのように参加したい。
- ✓ 家族や友達に根室高校の皆さんの探究活動を紹介するつもり。
- ✓ 北方領土問題に対してもっと理解を深めなければいけないと感じた。
- ✓ 元島民の高齢化が進んでいます。心配です。
- ✓ 情報発信者として、より正しい情報を学び発信していくことが大事ですね。

(分析 北海学園札幌高等学校教諭 三浦 琢斗 小林 真史)

2月10日(金)には、英語学習の成果を試す機会として、事業拠点校のグローバルコース2年生全員、特進コース、メディカルプレップコース、総進コースの希望生徒、次年度にグローバルコースに入ることを希望している生徒116名がTOEIC-Bridgeを受験した。このスコアがTOEIC L&Rであれば、どの程度になるのかという参考資料からすれば、もっと英語学習を強く推進していかなければならない状況であるのが明確であり、当機会を英語学習強化の契機としたい。短期目標については前述のとおりとし、中期的目標について以下に述べたい。

「HOKKAIDOにおいて結集した『北海「働」力』をSDGs達成のために積極的に我が国、世界へ発信する」としており、発信の場の中期的目標として「2024 SDGs Snow Crystal Project in HOKKAIDO 高校生国際会議」の開催を記載するとともに卒業生とのネットワークづくりの重要性にもふれた。この会議の実現のための土台作りとして、令和4年12月17日(土)に年間活動報告会・発表会 GLOBAL DAY 2022を事業拠点校で実施した。事業拠点校からグローバル系5チーム(含全国高校生フォーラム参加チーム)、理系4チーム、事業連携校から6チームが参加し、探究成果をパワーポイント等により発表した。次年度はより多くの発表が見込まれており、本事業の完成年度に実施予定の高校生国際会議の開催に向けて、ALネットワーク内の連携をより丁寧にしていきたい。

また、生徒間の交流が拡大し、これらをサポートする教員間の繋がりも非常に拡大しており、相互に教育実践を知る貴重な機会が増えている。さらに、長期的目標(10年)として記載したのは、本事業終了後も、事業拠点校がALネットワークを継続して活用し、引き続き事業連携校と共同で生徒が探究する機会を設け、実施していくこと、本事業に参加した多くの卒業生のイノベティブなグローバルリーダーとしての活躍の見守りと、彼らの高校生への指導と助言を期待し、体験談の講話やプレゼンテーション機会、ワークショップの指導等を見込んでいる。

9 次年度以降の課題及び改善点

① 本事業に関する管理機関の課題や改善点

管理機関が本事業に対する財政支援を行い、当ネットワークを維持すべく配慮していく意思である。さらに、管理機関内の大学でもある北海学園大学や北海商科大学の活用に関しては、北海学園大学工学部のENGINEERING LABO以外の学部と、より積極的な姿勢で事業構築のためのリソースとして活用すべきであると認識しており、北海学園大学の法学部・経済学部・人文学部・北海商科大学商学部とは、高校生が講義を聴くことは実施しているが、これにとどまらない事業の実施のために協議を継続していくことが課題である。

② AL ネットワークの課題や改善点

北海道という広大な地域の特性を ICT 活用しながら生徒の探究活動を進めていくとしているが、地理的な問題や新型コロナウイルス感染拡大、各事業連携校の年間教育計画との兼ね合いから、すべての事業にすべての事業連携校が関わることができなかったことから、こうした状況をより少なくしていくことが本ネットワークの課題である。今後も事業協働機関と年間教育計画の策定段階から連絡を密にして進めていきたい。

③ 研究開発にかかわる課題や改善点

(ア) 令和3年度の本事業に比べると ICT 活用上のトラブルや不手際は格段に減少した。本コンソーシアムが北海道という地理的に極めて広域な状況にあって、どのように学校間をつなぐかという点では、直接の往来による交流授業や協働探究活動が最も効果的であると考えているが、距離と時間の問題の解決のために ICT を活用することを避けては通れず、ICT 活用におけるトラブルと不手際の発生を最小限に抑えていくことに留意したい。具体的には、事業協働機関による講義を事業拠点校が一部の事業連携校に配信しなかったという問題を発生させた。この反省に立ち、次年度にこのような事態を生まぬように留意して事業を推進したい。

(イ) 新型コロナウイルス感染拡大等の社会情勢により、海外研修や海外からの留学生の受け入れについては、極めて制限された。1月には、オーストラリアから1名の男子生徒を1年間受け入れる予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大により、日本での生活を懸念したことから受け入れが実現しなかった。また、3月26日から3月31日に台湾語学・文化研修を事業拠点校生徒13名の参加により台北市・嘉義市において実施することができたのが幸いであるが、これを除き、その他の海外研修および海外研修旅行を実施することができなかった。オンラインを活用した海外連携校による講義や海外連携校生徒とのワークショップを実施することはできたが、次年度は直接の往来とオンラインとのハイブリッドな学習機会をより充実させることができるような状況であってほしいと願いつつ、体制を整備したい。具体的には、次年度に以下の事業の改善および実施に取り組む予定である。

- ・ 10月 2年生グローバルコース研修旅行 アメリカ合衆国ポートランド州立大学
- ・ 11月 2年生研修旅行 シンガポール4泊5日
- ・ 3月 希望生徒 台湾語学・文化研修 嘉義市基督教協同高級中學訪問

(ウ) 事業連携校が恒久的にカリキュラムの中に位置付けて取り組んでいる探究活動があり、これらは多岐にわたる。同じ北海道内にあっても、広大な地域性がこれらの先進的で特色ある教育活動の啓発を促進しきれていない状況にある。事業拠点校はこうした現状を改善するために、WEB 会議もこれまで以上に活用し、情報共有と先進的な各校の探究活動の普及に努めなければならないと認識している。次年度の課題として以下に取り組みたい。

- ・ 3月 事業連携校である北海道標茶高等学校総合探究発表会への事業拠点校の参加
- ・ 7月 民族共生象徴空間ウポポイ、元陣屋資料館を活用した事業連携校の北海道白老東高等学校との協働探究機会の実施
- ・ 10月 事業連携校である北海道平取高等学校が主催するアイヌ研究の事業において、生徒間交流時間の充実

(エ) 事業協働機関が提供する講義やフィールドワークは非常に斬新であり、私たちの生活の利便性、世界との繋がり、未来への指針を生き生きと伝えてくれる。これらの教育財産を事業拠点校、事業連携校及び事業協働機関がこれまで以上に協働することができるように、事業拠点校実行委員会が積極的に業務を遂行していくことが課題である。具体的には、本年度、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から実施することができなかつ

た以下について、実施のための環境を整備していきたい。

- ・ 6月 事業連携機関である JICA 国際協力機構札幌への生徒訪問および国際協力の学習機会を設定（職員による講義・青年海外協力隊 OBOG による講義・ワークショップ等）

【担当者】（管理機関担当者）

担当課	学校法人北海学園 総務部	TEL	011-841-1161
氏名	中野 勝栄	FAX	011-824-2881
職名	総務課長	E-mail	soumu@hgu.jp